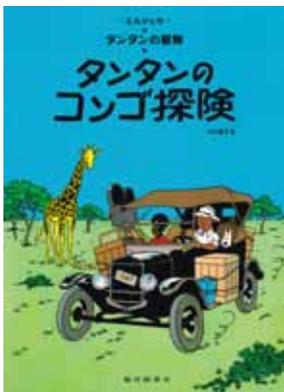


『TINTIN AU CONGO』（『タンタンのコンゴ探検』）

おやさと研究所教授
森 洋明 Yomei Mori

フランス語で書かれている漫画に「TINTIN」がある。作者はベルギーの漫画家エルジェ（Hergé：1907～1983）。彼が活躍した20世紀前半は、ヨーロッパがアフリカやアジアなどを植民地統治下においていた時代であり、この「TINTIN」では当時のヨーロッパから見た世界観を垣間見ることができる。

「TINTIN」はベルギーの新聞に連載される形で発表された。やがてシリーズ化され、最終的には24のシリーズとなった。記者である主人公のタンタンは、ヨーロッパだけでなく、中東、アジア、アメリカなど世界中に行く。ジャングルや砂漠、海底や宇宙とさまざまな場面で、奇想天外な筋書きで起こってくる事件や難題を解決する。これらの作品はベルギー本国やフランスだけでなく、英語をはじめ100以上の言語に翻訳され、日本語版もある。そして、このシリーズの2作目が『TINTIN AU CONGO』（1929年出版、邦訳名は『タンタンのコンゴ探検』）である。



筋書きは至って単純だ。タンタンがコンゴへ行き、サファリに出かけている途中で悪者に襲われるが、現地住民によって救われ、最終的にはアフリカ産のダイヤモンドを密輸しているギャングを捕まえるというものである。ただそのなかで、蛇や象に襲われそうになったり、崖から落ちてワニに食べられそうになったりと、ページをめくるごとに新たなストーリーが展開する。

この作品のなかで興味深いのは、その登場人物などの描き方である。当初は白黒で出されたが、カラー版になると真っ黒に描かれた現地黒人の身体がより鮮明に見える。黒色の顔には丸い目と大きな鼻、太いピンクの唇が描かれている。サファリの途中で出会う黒人は腰蓑だけを身につけ、槍を持って野生動物を追いかけられている。その姿はまさにステレオタイプの「アフリカ人」と言えるだろう。黒人では他にも呪術師や西洋風の衣装をまとった貴婦人が登場する。また、ライオンやサル、サイ、カバ、ヒョウ、キリン、バッファローとさまざまな動物が簡単に殺されていく。しかも同じ地域に生息しない動物が混在している。それはまさに当時の「アフリカ観」を表したものであったのではないだろうか。

コンゴ社会のこのような描き方が原因となり、この作品は人種差別や動物愛護の視点からしばしば問題視されてきた。タンタンが持って来た文明の利器に黒人が驚くところでは、スクリーンに写し出された映像を本物だと思って槍を投げる場面がある。他にも、熱病で苦しんでいる夫に悪い聖霊がついていると嘆く妻や、本来「Monsieur」のところを「missié」と訛った発音をする案内役も描かれている。黒人のフランス語に関しては、主語や冠詞、助詞を省いた台詞が目につく。実際2010年には、この『TINTIN AU CONGO』の販売差し止めや図書館からの撤去を求める民事訴訟があった。

そうした背景を踏まえて、日本語版（福音館書店、2011年）には編集部の名で以下のように但し書きがされている。

この本には、皆さんにぜひとも知っておいてほしい二つの問題が含まれています。

一つはコンゴの人々の描き方です。ここには当時のヨー

ロッパの人々がアフリカの人々に対して持っていた偏見が見られます。つまり、「無知」で「野蛮」で「迷信深い」アフリカの人々を、文明人である自分たちが指導し救ってやるのだという西洋中心の考え方です。（中略）今、この本を読んで、皆さんにこのような植民地時代の歴史的な背景をも考えていただけたらうれしく思います。

もう一つは、これも今では考えられないことですが、タンタンが動物たちを次々と銃で撃つシーンがあります。当時は、こんなことが一種のスポーツのように行われていたのです。野生動物の保護が叫ばれる以前のことで、自然界に対する人間の身勝手な行為の一つとして記憶されるべきだと思います。

確かにこの『TINTIN AU CONGO』という作品だけを「切り取って」見るなら、この作品には今日では受容できない黒人差別や動物虐待が描かれている。しかし、「TINTIN」シリーズのその他の作品においても、登場人物の多くは、いつも「間抜け」なのである。それは黒人に限られたものではなく、白人や黄色人、アラブ系や中南米の人たちなども、タンタン



にとっての敵味方とは関係なく、その間抜けな振る舞いで読者から笑いを引きだそうとしている。つまり、「TINTIN」の世界観はすべて「ずっこけ」であり、黒人の「無知」や「野蛮」だけがとくに強調されたものではないと言えるのではないだろうか。

とは言え、やはりそのなかには当時の実像が反映していることは否めない。奥地で伝道活動を行う白人神父、殺した象から象牙をとるタンタン。実際、この「TINTIN」シリーズでは、関連する歴史上の人物や出来事を想起させるようなスタイルが取り入れられている。そして何よりも、多くのアフリカの国のなかで特にこの「コンゴ」だけがタンタンの探検の対象となっているところに、当時のベルギー社会を反映していると言えるだろう。白人神父に代わってタンタンが教室で教える場面では、初版は「Mes cher amis, dit-il, je vais vous parler aujourd'hui de votre Patrie : la Belgique.」（「皆さん、今日は皆さんの祖国ベルギーについて話をします。」）という



白人神父の学校で算数を教えるタンタン業に変更されている。そうした意味において、「歴史的な背景をも考えていただけたら」ということに繋がっていくのだろう。

「タンタンが出向いた」コンゴはベルギー領で、現在のコンゴ民主共和国である。しかし、フランス領コンゴだった現在のコンゴ共和国でも、土産物屋では木彫りや銅板、針金などで作られたタンタングッズが売られている。店の人は冗談混じりで「タンタンはコンゴに来たんだ」と言う。もちろん商品を買ってもらうための「方便」だが、そこにはあの「TINTIN」シリーズに「選ばれた地域」としての自負のような空気が感じられた。